

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第2回 「ウガンダの父」 柏田雄一氏と若き後継者奥龍将氏

連載 2 回目の「カンパラ通信 ～ナカセロの丘から～」をお伝えします。連載 2 回目は 7 月 21 日から 26 日にかけて大阪府泉佐野市から千代松市長を団長とする友好訪問団がウガンダを訪問されたことを通して見たウガンダと日本の繋がりをご披露いたします。

友好訪問団到着の翌 22 日には、大使公邸で訪問団来訪歓迎の夕食会を開催しました。ご参加いただきましたのは、友好訪問団のメンバーの方々、主な訪問先となる北部ウガンダの中心グル市の市長や同地域出身の国会議員や市会議員、それにこの訪問をウガンダ側でアレンジされた貿易産業省の副大臣や担当課長等総勢 20 人です。友好訪問団は、23 日にはグル市に到着し、心温まるも熱烈な大歓迎を受けました。そして帰国の途につく前には大統領官邸にてムセベニ大統領との接見も実現しましたが、これもみな日本との関係発展を願うウガンダ側の熱い期待の表れです。



(写真 1：グル市で大歓迎を受ける千代松・泉佐野市長)



(写真 2：ムセベニ大統領表敬訪問)

友好訪問団には今回の訪問に至ったキーパーソンたる奥龍将氏が同行されていました。彼は、泉佐野市で綿織物を扱うスマイリーアース社の若き経営者です。同社ではウガンダ北部で取れるオーガニック・コットンを原料にした真面綿という製品を製造・販売しています。彼の熱意が市の提携を深めるきっかけを作ったのです。

この奥氏がウガンダ産のコットンを使って綿製品作りを始めたのには、深い理由があります。遡ること 50 年、柏田雄一氏（84 歳）という日本人男性が独立間もないウガンダに渡り、同国産のコットンを使ってシャツ作りに人生を捧げました。奥氏は、その柏田氏を受け継ぐとの気持ちからウガンダのオーガニック・コットンを原料にした「真面綿」タオルや寝具を製造・販売を始めたとのこと。ということで話を柏田氏まで遡ることに致します。

柏田雄一氏は、「ウガンダの父」と呼ばれ、ウガンダと日本との関係においては伝説的な人物です。作家の山崎豊子さんが書かれた「沈まぬ太陽」アフリカ篇に登場する「富士ワイシャツ」の「松田工場長」という人物はこの柏田氏のことです。柏田氏は 1931 年 10 月生まれ、大学を卒業して 1958 年にヤマトシャツ社（現・ヤマトインターナショナル）に入社。ウガンダで同社のシャツが売れているという情報を聞いた社長に命じられて入社して日も浅い柏田氏は同国を視察することになりました。このことをきっかけに、ヤマトシャツ社はウガンダ開発公社、丸紅とともに「ユージル」という名の合弁会社を 1965 年にウガンダの首都カンパラに設立し 柏田氏はその工場長として同国にとどまることとなりました。その後ウガンダはアミン将軍がクーデターで権力を掌握していく中で国内は混乱の時代を迎えます。そのような非常事態の中でも柏田氏は現地に留まり、事業を続けました。しかし、1984 年に当時の政府に追われやむなく日本に帰国したのです。柏田氏が去った後のユージルは経営不振に陥り、工場も閉鎖されました。

1986 年に権力の座に就いたムセベニ大統領は、柏田氏に「ウガンダに帰ってきてくれ」と度重なる懇願をしました。それを受け、柏田氏は 1999 年にウガンダへ戻り、「ユージル」の資産を買収して「フェニックス・ロジスティクス社」として衣料工場を再び立ち上げました。

この時代のウガンダでは中国製製品が国内市場を席卷していたため、柏田氏は、欧米に売れるものとしてオーガニック・コットンを原料としてウガンダの特産品として売り出すことで海外市場に活路を見出そうとしました。私の前回ウガンダ在任中の 2006 年から 08 年は、柏田氏がオーガニック・コットンを材料にしての製品づくり及び販路の開拓・確保に努力されておられる時期にちょうど当たっておりました。そのような経緯で、当時の日本大使館では、フェニックス社が新しい機械購入に必要な資金調達のため日本国際協力銀行からの融資を得ることについて協力させていただきました。同融資も目途がついた 2007 年 2 月、フェニックス社から米国向け初出荷を記念したイベントがムセベニ大統領の出席を得

て同社工場で華々しく催されました。私もその折は臨時代理大使として同席しまさに不死鳥の名のとおりフェニックス社の起死回生に惜しめない拍手を送りました。残念ながら、リーマンショック等の影響もありフェニックス社が業績を伸ばすことは容易ではなく、加えて柏田氏も高齢により体調も崩し、ついに2015年にウガンダを離れ、無念の帰国をするに至りました。



(写真3：ウガンダ在住時代の柏田氏)



(写真4：私と奥龍将氏)

そんな柏田さんの偉業を継ぐべく立ち上がったのが若き奥龍将氏でした。

奥氏が在住する泉佐野市は、日本のタオル発祥の地であり、現在も泉州タオルは地元を代表する特産品となっています。市役所には新たに「泉州タオル担当参事」をおき、タオル産業の一層の振興を図り、そして積極的に泉州タオルを全国に発信していると聞いております。

聞くところによりますと奥氏のお父上が2004年頃にアフリカを旅行した際に柏田社長にお会いしたことで柏田社長との縁が深まり、ウガンダとの縁も深まったとのこと。お父上に影響を受けた奥氏自身が何度もカンパラの柏田社長を訪れ、フェニックス社でオーガニック・コットンを紡績した糸を輸入し、これを原料に日本国内で製品化をし販売を始めました。現在は、ウガンダ製オーガニック・コットンを近くの紡績工場に糸にしてもらい、スマイリーアース社が開発した同じくウガンダ北部産シアバターを使った精練技術により環境にやさしい高品質の綿製品、タオルやベビー衣料、寝具を製造しております。

私は、これらウガンダ発の高品質の原料が日本の製品にますます使われ、その製品の製造・販売が普及し、それによりウガンダ北部の綿花産業が発展していくこと、二国間の産業協力を通じて泉佐野市とグル市の友好関係が市民レベルまで深まっていくことを切に希望しております。

良質なオーガニック・コットンの生産が根付くよう現地の生産業者の間に啓蒙すること、

優良な生産者たる人材を育成すること等解決すべき課題は少なくありません。幸いウガンダ貿易産業省のオネン次官は在京ウガンダ大使館で長く勤務したご経験もあり、奥氏の事業にも多大なご理解を示され、しっかり応援していただいております、ウガンダ側の力強い味方です。

JICA も中小企業海外展開事業の枠組でスマイリーアース社の提案の「オーガニック精練技術を活用した綿花製品の付加価値向上に関する案件化調査」を昨年採択し、資金面で同社の提案を後押ししております。駐ウガンダ大使として私もできることがあればどんな協力も惜しまないつもりでおります。

私も駐ウガンダ日本大使として、この日本とウガンダとの産業協力が成長していくように、必要な場合にウガンダ政府やグル地域の地方政府に働きかけるなどして積極的に応援していきます。

(以上)